

私にとって一番大切なもの  
祖父からの教え

都市地域社会専攻 李詩佳

私は今年の5月に23歳になりました。23歳というのは、すっかり大人とも言える年齢で、ブラックコーヒーでも飲めるようになっていたのだろうかと思像したこともあります。でも実際は未だに飲めなくて、前と何も変わりません。しかし、そんな今年の夏に、身をもって自分の成長を感じさせたある祖父からの教えをもらいました。

今年の8月29日に、私の祖父がなくなりました。ちょうど私が一時帰国したその日に。それははじめての身内の死の経験でした。祖父の家で、そのほそいほそい遺体を見て、生きていた頃の祖父を思い出しました。私と一緒に祖父が初めて地下鉄に乗って、喜んでしたこと。祖父が良くおいしい料理を作ってくれたことなど。これらの思い出が重なり合いました。もっと早く帰ればよかったという悔しさ、もう祖父に会えない悲しみ、初めて遺体を見た恐怖までもが一気に私を襲い、ぼろぼろと涙が止まらなかった。正直、死が怖いです。自分の死もそうですし、身内の死もそうです。これから先もどんどんそういう経験に直面しなければならぬこと、家族という場所がどんどん空っぽになることを考えるだけで、胸が詰まります。さらに、自分が永遠に子供のままで生きていきたいという23歳にしては情けない考えもしました。

そんな時に、ふっと私の目が留まりました。それは泣いていた母、はじめて見たかもしれない、そんな弱くて悲しい顔をしている母。父親を失った母は、きっと私より何倍もつらい痛みを耐えているでしょう。また、私よりずっと背の高い4歳下のいとこ。まだ19歳の彼はいつもパソコンやゲームに夢中になって、無口な子ですが、その日は呆然として涙を流しました。小学校までは祖父の家で過ごしておじいちゃん子だった従兄弟は、きっと私より辛いです。その時、私は初めて自分のこの家族における本当の役割を感じました。今まで、一人っ子の私が家族の中心だと当たり前のように思っていました。当たり前のように親から愛情を受け取り、当たり前のように親に甘えていました。でも、この夏に、私は自分もこの家の力にならなければならないし、家族というのは支えあうべきものだと、よく感じました。それは、他界した祖父からの大事な教えではないでしょうか。

8月29日、私は朝早く電車に乗って、上海まで3時間の飛行機に乗りました。空港から直接祖父の家に行き、一度自宅に帰ったのですが、その時に知らせをもらって、もう一度祖父の家に駆け付けました。朝から晩まで、まさかこんなに人生が変わるなんて。本当に長い一日でした。でも、家族の存在は私にとってどこに居ても、何時間かかっても、帰りたくなる場所です。出航した船が錨を下ろした場所に帰るように、家族は私にとっての錨です。そこに私の背中をずっと見守ってくれる人たちがいます。それが祖父からの最後の教えで、私にとって一番大切に、一番心強くさせる存在です。